

不親切教師のススメ

松尾英明 ◆ Matsuo Hideaki

●不親切教師のススメ

学校教師は、基本的に真面目で親切である。子どもの教育に関するあれこれに気をまわして手出し口出しをし、自分のことは後回しにしても、身を削って相手のお世話をする。しかし、これが本当に教育として、そして子どもの成長にとって良いことと言えるのだろうか。

本書が提案するのは、これとは真逆の「不親切教師」のススメである。子どもが自分でできることに対しては手出し口出しをせずに見守り、自身の時間も大切にすること。

不親切教師の目指す方向は次の二つである。

一、子どもの主体性の向上

二、教師の仕事の精選による負担軽減

さて、なぜこの二つが大切と考えるのか。それは、現状の学校現場が、次に示すような問題を抱えているからである。

「きめ細かな指導」「個に応じた指導」の大切さが叫ばれて久しい。子どもたち一人一人の個性を生

かした教育をしていこうという流れは至極当然である。

しかしながら、この流れを受けて現在の学校には度を過ぎて「親切すぎる」「丁寧すぎる」と思われる対応や習慣が数多く存在するようになってきた。授業では個別のプリントを用意し、個別に指導にあたり、個別に様々な要望を受け付ける。個別対応が当然となれば、時間外の対応も多くなる。「個に応じたきめ細かな指導」「個別最適な学び」への対応に追われる教師はもちろん苦しい。しかしこれも子どものためだと言われれば、がんばるしかない。子どもの成長結果への責任は、自分にあると考えるのだから当然である。

実はこれが、子どもや保護者の苦しみの遠因となっていることに気付いているだろうか。子どもたちは、よく気を回してお世話をしてくれる教師のお陰で、その時点では何事もなく平和に過ごせるかもしれない。しかしこの子どもたちは、主体性を失って成長の機会を奪われたまま大きくなる。自分ではできない、考えない、責任をとらない子どもが量産される。その保護者も同じような思考に染まっていくが、その時には気付かない。それに気付かされるのは、子どもが反抗期に入り、学習に対して無気力になったり、やたらと親のせいにするようになったりしてからである。依存の行き着く先は、大学を選ぶのも入学させるのも、果ては就職先までも親の責任ということになっていく。

これは極端な例かもしれないが、お世話をし過ぎて子どもを依存的にさせるとするのは、そういう結果まで責任を引き受けるということである。

そもそも教師がやたらと「親切」なのはなぜか。子どもへの愛情という面もちろんあるかもしれないが、その実はただ「がんばっている」ことの確認によって自己満足を得たい場合や、クレームを恐れての過剰サービスであることもある。つまりは自信のなさからくる「バリア」「体面」「予防線」のような面が見え隠れしている。あらゆる業界において、過剰サービスに慣れた顧客は、相手への要望ばかりが高くなり、受動的かつ自己中心的になっていく。有難いはずの恩恵は、やがて当然の権利に変わっていくのである。

学校とは、何のために存在するのか。それは、子どもの成長のためである。子ども自身が学び成長することこそが目的である。親切にしてあげることで一時的に子どもが助かった、あるいは良くなったように見えるかもしれない。その助けによって教師は「ありがとう」「うれしい」「先生大好き」と言われるかもしれない。しかしそれが長期的に見て、子どもの成長に寄与したのか、子どもの人生において良いと言えるのかどうか。

人は基本的に、直面した困難に対し自ら解決していくことで成長する。困った時にすぐに手助けして解決してくれる大人が常にそばにいることは、子どもにとって便利だが不幸なことである。子どもを依存的かつ他責的な人間にしている可能性がある。

このような状況を打開するのが不親切教師である。何より子どもにとってより良い教育環境をつく

ることを目指す。それはつまり、子どもの主体性が向上し、仕事の精選によって教師の負担が軽減されることもある。そのためには、教師が余計なお世話をし過ぎずに、子ども自身の手で成果を上げていくような教育をすることである。

本書では、学校教育の抱える諸問題を例に取り上げながら、不親切教師の視点でその解決策を模索し、よりよい教育のかたちを提案していく。

二〇二二年 六月

松尾英明

一、「楽しい授業」をやめる

——親切・丁寧・サービス満点をやめて、学力向上

- ① サービス満点の「楽しい授業」を捨てる……12
- ② やってる感で〇つけをしない……17
- ③ 不親切こそ学力を向上させる……21
- ④ 寄り添い過ぎれば「つきまとい」……24
- ⑤ 学習を我慢させない……27
- ⑥ 「漢字が書けないと将来困る」のウソ……30
- ⑦ 読めない漢字もばんばん板書……33
- ⑧ 「〇〇ができない」で困るのは誰か……36
- ⑨ 「できる」以外の目標を……40

二、習字の掲示をやめる

—— 教室環境をこねくりまわさない

- 10 教師が作る美しく整った教室掲示……44
- 11 同じ字を並べて掲示する意味は？……47
- 12 「私の選んだ字」で個の掲示……50
- 13 個人別クリアファイル掲示物……52
- 14 教室のモノの配置……54
- 15 教室に「子どもだけの空間」を……57
- 16 机のスクール型配置で「教師に注目！」……60

三、「してあげる」をしない

—— 担任がすべてを請け負わない

- 17 名前シール貼りの親切……66
- 18 「主体性をもたせる」？……69
- 19 「休み時間を削って授業」は権利侵害……72

- 20 あえて一緒に遊ばない……75
- 21 休み時間は「みんな」で「ドッジボール」……78
- 22 「一人ぼっち」の子ども……82
- 23 百点満点をほめるより……84
- 24 勉強しなさいと言う代わりに……86

四、「揃える」をやめる

——時代おくれの根性論排除

- 25 真夏も真冬も体操服は同じ……90
- 26 体操服指定縛り……93
- 27 「標準服」の合理的配慮……97
- 28 「揃えない」ことで自由になれる……100

五、「きちんと座りましょう」のナンセンス

——個性や発達の違いを理解する

- 29 「座りなさい」より「歩いてもいいんだよ」…… 104
- 30 「乱暴な子」と言われてしまう子ども…… 108
- 31 発言できなくても構わない…… 112
- 32 「喋らない子」はよく聞いてくれる子…… 116
- 33 「背の順」は身体的特徴による差別の誇示…… 119
- 34 髪型・服装指導問題 その1…… 123
- 35 髪型・服装指導問題 その2…… 127
- 36 左利き用文房具…… 130
- 37 給食は「完食」が目的じゃない…… 132
- 38 「苦手なもの」はあつていい…… 135

六、かわいい子には……

——「危ないからやらせない」が将来一番危ない

- 39 子どもの危険対処能力…… 140
- 40 学校は「安全第一」…… 143

- 41 鬼ごっこは「自己責任」…… 147
- 42 子ども同士のけんか…… 150
- 43 破る者がいる前提のルール…… 153

七、子どもの家庭を覗かない

——それこそ余計なお世話であると知る

- 44 家庭にも不親切教育をすすめるよう…… 158
- 45 親切な教師は、毎日宿題を出す…… 161
- 45 宿題を出すのならば…… 166
- 47 「母の日」「父の日」はスルー…… 170
- 48 「早寝早起き朝ごはん」ができない家庭…… 173
- 49 感謝の手紙を「書かされる」違和感…… 176

「楽しい授業」をやめる

——親切・丁寧・サービス満点をやめて、学力向上

サービス満点の「楽しい授業」を捨てる

「いつも楽しい授業」をする。

子どもから「いつも面白い先生」と言われる。

教育書のタイトルにも並ぶような魅力的な文言である。こういう「疑いようのない当たり前の良いこと」は、真つ先に疑うべきポイントである。どちらも「親切」であるが故に起きている現象である。結論から述べると、この種の親切を続けていけば、子どもたちは確実にダメになっていく。

この一見高評価は、子どもの成長にとって、マイナスに働く可能性が高い。なぜならば、こういうことをやればやるほど、子どもは受動的になり、依存的になるからである。

具体的な事例を挙げて考えていく。

毎回、とても楽しく、囁んで含めるような懇切丁寧でわかりやすい授業をしている勉強熱心なA先生。全国で広く活動している大きな教員サークルにも加入しており、授業力も高く、仕入れたネタも豊富なのでパフォーマンズも派手で面白い。A先生の授業を受けた子どもたちは、

「次はどんな楽しい授業を用意して、面白いことしてくれるんだろう」

と、わくわくして次を期待している。それが期待通り面白かったとなれば、その次も期待する。

さて、そんなA先生とて、毎度毎度面白い授業ができるわけではない。どうやっても面白くできない内容を扱わざるを得ない時もあるし、体調が悪くて気分が乗らない日もある。そんな時、子どもたちからは容赦なく「今日の授業つまんなーい」という声。焦るA先生は、授業の本筋とは関係ないネタやパフォーマンズで子どもたちを笑わせ、何とかその人気をキープする。

この後は、大きく二つの道に分かれる。

一つは、やがてそのネタが尽きて、A先生が子どもたちにそつばを向かれるというもの。たつぷり過剰サービスを受けて受動的で依存的に育った子どもたちは、自分たちを十分に楽しませない人には用がなく、冷徹で手厳しい。辛口グルメ評論家のようになっている状態である。

もう一つは、何とかA先生がその年を楽しくやり切った場合で、こちらはより性質^{タチ}が悪い。甘やかされ続けて受動的かつ依存的評論家集団と化した子どもたち。それをもつ次の担任は「去年はもっと面白い授業をしてくれた」「A先生はもっとやってくれた」という厳しい評価を子どもたちに常に下され続けるようになる。この子どもたちが、その後もこの態度を正してくれる適切な教育を行える力のある担任に受け持たれずに育ってしまった場合、上学年になるにつれてそのお客様の態度が大きくなり、学校内で「面倒で厄介な学年の子どもたち」として扱われるようになる。

いわゆる「どうしようもない子どもたち」であるが、実はどうしようもないのは子どもの方ではな

く、教育した学校の側であるという深い自覚と反省が必要である。どうしようもなくダメな教育は確かに存在するが、どうしようもない子どもなど本来一人もいないのである。

これは、何も特殊な珍しい事例ではない。全国各地で当たり前のように起きている現象である。「楽しい授業」や「面白い先生」という、どう考えても良いと思えない教育の先にあるのは、そのような楽しい、面白いとはほど遠い、暗い不快な現実である。

これら一見「良いサービス」は良いものであればあるほど、裏を返せば、完全に受け身の「お客様」を育てていることになる。子どもが常に素晴らしいサービスを期待している状態である。高級旅館のおもてなしや、最高の料理、あるいは各種エンターテインメントを期待する姿である。主体性をもたず、他に癒しや刺激を求める行為である。学校教育で育てるべきは、お客様の精神ではなく、むしろそういった社会的な価値を自ら生み出し提供していく側の人間である。

では「楽しい授業」「面白い先生」を捨てて、これからの授業では、何を目指せばいいのか。

本書の提案する不親切教師を目指すのは、常に主体性をもって学ぶ子どもたちである。

授業とは何かを与えられて注入される場ではなく、課題に対し自ら気付き獲得する場であると捉える。あらゆる何かを与えてもらうのではなく、自分のことを自分で行う場である。教師にとっては「授

「業」の場であるが、子どもにとっては「学び」の場である。「授業」は「業を授ける」と書くのである。くまで主語は教師であるが、「学び」の主語は子どもである。主体性をもって学ぶ場なのである。

実際に授業をするに当たっては、教師は教えるべき最低限のことは教えるが、後は自分たちで考えるよう促す。さつさと「正解」「公式」を教えれば終わるかもしれないものも、勝手にこちらから教えないし介入もしない。自分たちで考えればわかるようなことならば最後まで教えない。その教えることと考えることの選別、見極め作業が教材研究そのものとなる。「不備・不足・不十分」*をこそ見極めるのである。そして子どもが自ら気付けないであろう「考えるべきこと」にあたる部分を「発問」という形で投げかける。

これを戦略と決めて子どもに力をつけるのを目指す場合、教師側としても、軌道に乗るまではかなり忍耐の道である。はつきり言って、面倒である。さつさと教えてしまった方が早いし楽である。安きに流れるのが人情、やろうと思うけど途中でくじける、というのが普通である。大人でもそうなのだから、子どもはなおさらそう感じるはずである。

しかし、だからこそ、やる価値がある。どんなものにも、安易な方と大変な方がある。背筋を曲げる方が安易で、腰骨を立てるのは大変である。靴を脱ぎ散らかす方が安易で、脱いだ靴を揃える方が大変である。大変なことだからこそ、それを選択して行った先には、価値がある。そういう大変な方を、凜として教える。森信三先生の「立腰教育」であるが、温故知新とはよく言ったもので、今のよ

うな時代だからこそ、こういった教育が必要とされているのである。

「楽しい授業」に慣れて受動的で依存的になった子どもは、この点において弱くなる。相手の言うことに黙って従う方が楽だから、自分が正しいと思うことを意見する力を失う。すぐ結果が出て得する方法をとる方が楽だから、今苦労して回り道することが耐えられない。腰骨を立てて座ってられないのである。しかし長い目で見た時に、本当の意味で楽になれるのは、今が大変な選択をした先の未来にある。

※ 野口芳宏『心に刻む日めくり言葉 教師が伸びるための 野口芳宏 師道』さくら社

やっってる感で○つけをしない

放課後の教師の机の上に、山となって積みあがっているものがある。子どもたちから回収した漢字ドリルや算数ドリルである。言わずもがな、○つけとチェックをするためである。

教師に「何のために」と尋ねたら「○をつけてあげること、子どもの力になれる」「○をつけることで学習状況を把握する」「間違いがあったら教えてあげられる」「子どもの授業でのがんばりを認める場として」等の回答が考えられる。

しかしながら、それが本当に子どもの力になるのか、成長につながるのかというと、答えは「否」であることが多い。労力がかかるので、教師の「子どものためにやっってる感」は出ると思うが、残念ながらそれは単なる自己満足である。教師がドリルに○をつけても、子どもの力にはならない。ドリルの丸つけは、子どもにとって「セルフチェック」という自己診断力をつける場にもなるのである。自分のやったドリルが、どれだけ正しく書けていたかを、冷静に見る力をつける場である。セルフチェックの力を高めることが、主体的な学習態度を高めることにも通じるのである。

よって、ドリルの○つけは子どもが自分自身でやればよい。教師の側の到達度チェック&成績をつ

ける目的のテストならまだしも、反復のための練習問題で他人に○をつけてもらう必要はない。

子どもが○つけを自分でやると、メリットが大きい。

まず、実施から終了、○つけまでがタイムリーである。解答集を自分でもっていれば、一切待つ必要がない。わからない時や自信がない時は、途中で確認しながら進めることもできる。

また、回収しない前提なので、ゆっくり取り組む子を急かす必要もない。誰に気兼ねすることなく個に応じた自分のペースで取り組み、答え合わせまでできる。

これを言うとき必ず「子どもがすぐ答えを見てしまうからだめだ」という反論が出るが、これこそが根本的な勘違いである。「わからない時は手本を見て学ぶ」というのは学び方の基本である。特に理解度が浅い段階なら、見て学ばばいい。そもそもドリルとは語源からしてらせん状に回転しながら繰り返し進んでいくことであり、基礎的な知識や技能を学ぶためのものである。決して創造性（クリエイティビティ）を育てる目的の教材ではない。よって、さっさと正しい解答を見て学ぶのが正しい使い方である。

また、自分で○つけをするとなると、自分の書いたものに対し、結果責任が生じる。終わったからボンと提出して「よく見て○つけといて」とはならない。漢字だったら、細かいところや送り仮名に誤りがないか、セルフチェックが必要になる。計算ドリルだったら、「6」なのか「0」なのか判別

不能な字に直面することになる。「こんな紛らわしい字を書いて！」と憤慨するのが教師ではなく書いた子ども自身になる。少なくとも「自分でも読めない字」は少なくなる。

このセルフチェックができるという力は、一生学んでいく上でかなり重要である。これがやがて、自分で購入した参考書の問題を自力で解いて答え合わせをする力や、仕事で自分の書いた書類をセルフチェックするといった、後々確実に必要となる力の基盤となる。将来を見据えるという意味でも、ドリルの〇つけに関して不親切な方が、明らかに力がつく。

ただし前提として必要な条件は、これを教師が授業できちんと教えていることである。漢字ドリルならばきちんと授業中に実施し、新出漢字を扱う際には間違えやすいポイントなども教える。「左」と「右」、「上」の書き順など、教えないければ混同したり間違って覚えたりするのは明白である。

計算ドリルを学校で購入したのならば、授業中に使って〇つけまで各自で行い、間違えやすいポイントまで教えるのが筋であり、全てを家庭での宿題として出すのは本来的な使い方ではない。

例えば、授業中に次のように語る。

今、ドリルであなたが〇つけをして間違えていたところが、今日学習した内容の中で、まだ十分に身に付いていないところになります。そして、間違えた問題は人によって違います。あなたが間違えた問題を隣の人はできているかもしれない。逆に、あなたは〇だった問題を、隣の人は間違えているということもあります。つまり、人によってもう一度がんばるべき問題は違うので

す。では、この間違えた問題はどうしますか？　そうですね。今は赤で×をつけておいて、後でもう一度やるのがいいのです。今は一度答えを見て解き方を覚えたかのように思えますが、忘れるかもしれませんね。少し時間を空けて、家でもう一度やってみましょう。それが今日の宿題です。必要な宿題の内容も量も、人によって違うのです。みんな違う人間なんだから、当たり前です。もう一度やってみて、合っていたらおめでとう、青で○をしましょう。間違えていたら？　そう、今度は青で×をつけておきます。その問題は？　また時間を空けてやるといいですね。今度は緑など色を変えて○か×。こうして、自分のやるべき問題が自分でわかり、わかるようになるまで諦めずに何度もやるのが、力のつく勉強の仕方です。漢字の場合でも何でも同じです。自分で自分を育てていきましょう。

実施から○つけまで含めて、全て投げっぱなしにしておいての自力解決では力はないということである。ドリルに自分で○つけをするのも、授業中に指導しておいてこそである。

先に親切に指導しておいて、そこから先は不親切にする。「教える」と「自力でやる」ということへの移行ステップそのままであり、指導の基本的な型である。

● 著者紹介

松尾英明 (まつお ひであき)

公立小学校教員。

「自治的学級づくり」を中心テーマに千葉大学教育学部附属小学校等を経て研究し、現職。

単行本や雑誌の執筆の他、全国で教員や保護者に向けたセミナーや研修会講師、講話等を行っている。

学級づくり修養会「HOPE」主宰。

『やる気スイッチ押してみよう！元気で前向き、頑張るクラスづくり』（共著）『新任3年目までに知っておきたいピンチがチャンスになる「切り返し」の技術』『「あれもこれもできない！」から…「捨てる」仕事術』『お年頃の高学年に効く！こんな時とっさ！のうまい対応』『スルー？orリアクション？指導の本質を「見抜く」技術』『1人1台端末で起こるクラスのICTトラブルへの予防と対応』（以上全て明治図書刊）等の著書のほか、メルマガ「二十代で身に付けたい！教育観と仕事術」は「2014まぐまぐ大賞」教育部門大賞受賞。2021年まで部門連続受賞。ブログ「教師の寺子屋」を主催し、『プレジデントオンライン』『みんなの教育技術』『こどもまなびラボ』等でも執筆している。

不親切教師のススメ

2022 年 8 月 2 日 初版発行

著 者 松尾英明

発行者 横山駿也

発行所 株式会社さくら社

〒 101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-20 ワカヤギビル 5F

TEL : 03-6272-6715 / FAX : 03-6272-6716

<https://www.sakura-sha.jp> 郵便振替 00170-2-361913

ブックデザイン 佐藤 博

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

© Hideaki MATSUO 2022, Printed in Japan

ISBN978-4-908983-61-0 C0037

*本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

*乱丁・落丁本は、送料小社負担にてお取り換えいたします。